



先日、BBC ネットニュースを見て、アンネ・フランクにはアメリカにペンフレンドがいたという記事に目を惹かれました。一度だけの手紙のやり取りであったけれども、アメリカのアイオワ州の片田舎ダンヴィルの町に住む

少女ファニータ・ワグナー（Juanita Wagner）のもとに、アムステルダムに住む少女アンネ・フランクの手紙が残されていたのです。ダンヴィルはアイオワ州の東南部にあり、人口 1000 人にも満たない小さい町です。その Danville Station の中に、2018 年 4 月 16 日に、約 80 年前のアンネの手紙に因んで、記念館が設立され、様々な展示がなされています。

1939 年の夏休みにヨーロッパ旅行をされたダンヴィルの学校のマッシュズ先生は、生徒たちにペンフレンドを持つことを指導され、故郷を超えたところに何があるかを、文通を通して知らせたいと考えました。1940 年の 1 月にアムステルダムのモンテッソーリ学校の生徒の名簿を手に入れました。その中にアンネ・フランクの名前があったのです。当時 10 歳だったファニータは同い年のアンネを選んで、手紙を書きました。この手紙交換はアンネの家族が隠れ家に住む前になされたものでした。ファニータは自己紹介として、主に農園での生活、父は亡くなっていて、母と、姉ベティと暮らしていると書きました。

1940 年 4 月 29 日付の返事がきました。アンネは、アンネの学校生活、両親と姉、祖母について書いています。誕生日が 6 月 12 日であること、ファニータの写真がほしいと言ってきました。アンネはまた、アンネの友人もファニータの学校の他の生徒に手紙を書きたいと思っているんじゃないか、自分は絵ハガキを集めているとも書き、アムステルダムの運河とアンネの学校の写真を送ってきました。もう一つ、アンネの姉マーゴットの手紙も同封されていました。マーゴットの手紙はアンネとは違って、当時ヨーロッパで起きていることや、ラジオでニュースを聞いていることにも言及しています、スイスに住んでいる従妹に会いたいが、ビザが下りないとも書いています。

この手紙が投函された直後の 5 月 10 日にアムステルダムも空襲を受けましたので、手紙の交換などは不可能になったでしょう。アンネがユダヤ人であるとは知らなかったものの、戦争の間中ファニータ姉妹はアンネの家族を心配していました。戦争が終わり、手紙を出したところ、アンネの父からの返事があって、すべての事情を知ったといいます。また、アンネ姉妹が英語で手紙を書いたのはアメリカで働いたことがある父がファニータの手紙をオランダ語にして読んでやり、返事を英語に翻訳して、それを書き写させたことも分かりました。ファニータ姉妹には悲しい思い出になってしまいましたが、手紙をそのまま取って置いたそうです。そして 1957 年に「アンネの日記」のお芝居がブロードウェイで大ヒットしていることをカーラジオで耳にして、その手紙のことを思い出しました。ファニータの姉のベティの友人が、第二次世界大戦のゆかりの品を集めていて、その人に勧められて、大事なものと思い、1988 年にオークションに出したといいます。165,000 ドル(約 1765 万円)で匿名の人が落札し、ロサンジェルス の Simon Wiesenthal Center に寄付され、今も、保管されているそうです。

ダンヴィルの学校ではホロコーストについて学んでいます。約 150 万人の子どもたちが大量虐殺されたことを覚え、友人、知人、スターや運動選手に、アンネの展示についての小冊子を送ることによって、世界中から 150 万枚の絵ハガキを集めることを始めているとのこと。